

令和4年度 文教経済常任委員会 視察報告書

1 視察日

令和4年11月14日（月）

2 参加委員

池田尚江委員長、高橋浩輔副委員長、木南和也委員、宮越馨委員、本山正人委員、小林和孝委員、渡邊隆委員、上野公悦委員

3 視察先

名称：A i C Tコンソーシアム

住所：福島県会津若松市東栄町 1-77

人口：114,599人（令和4年11月1日現在）

面積：382.99 km²

4 調査事項

スマートシティの取組の全体像、ものづくり領域の取組について

5 視察の目的（視察先の選定理由、当市が参考にすべき点など）

会津若松市は、急速に進む人口減少や少子高齢化などの諸課題に対応するために、東日本大震災後の平成25年2月にデジタル技術などの最新技術を様々な分野で活用する「スマートシティ会津若松」の取組を始めた。そして、これまでのおよそ10年間の取組で、産学官の連携のもと、いくつかの事業を軌道に乗せてきた。

また、平成31年4月には「スマートシティA i C T」が開所し、国内外のI C T関連企業が集積して多くの事業展開に繋がっている。さらに、これに留まらず「スマートシティ会津若松」の取組の深化発展のため、国の「スーパーシティ構想」への挑戦を継続し、こうした一連の取組を市民の暮らしの利便性や快適性の向上、産業の振興や雇用の創出に繋げ、豊かな地域社会の実現を目指している。

当市においても各領域におけるD Xの推進に着手されており、先進地である会津若松市の取組を視察することは、時宜を得た有意義なものとする。

6 現状等（社会情勢、当市・他市の状況、問題点など）

D Xは、様々な言葉で定義がなされているが、大きくは「I T、I C T、I O T等のデジタル技術を社会における諸課題の解決に活用し、人々の生活をより良いものへと変革すること」と捉えることができる。現在、日本では急速な人口減少に起因する諸課題が顕在化しており、それが徐々に深刻化してきている。それは、特に地方において顕著で、当市においても例外ではない。

市も地域D Xの推進に舵を切ったが、まだまだ緒に就いたばかりである。今後、

様々な先進事例等を研究しつつ、社会状況等も見据えながらの推進が望まれる。また、当市は歴史的に「製造業のまち」の側面も持っている。産業分野（ものづくり領域）での導入による生産性の向上等にも効果が期待される。

7 説明を受けた内容

- ・ スマートシティの取組の全体像
- ・ ものづくり領域の取組について

8 所感（当市に導入すべき点、導入に当たり注意すべき点、今後の方向性など）

- ・ 平成5年の会津大学の開学がキーポイントであると認識した。その後の産業に関わるまちづくりの基盤や人材の確保に繋がった。
- ・ 決して交通の利便性が良いとは言えない地方都市に、なぜ上場企業のサテライトオフィスが集積できたか。傑出したカリスマ性を持つリーダーの牽引力の影響は大きい。当市においても、中核となる「人材」の招聘がポイントとなるのではないか。
- ・ 複雑化、複合化する諸課題に対し、テクノロジーを用いて持続可能な地域にしていかなければならない。スマートシティ構想は、正に画期的な取組であると考ええる。当市も積極的に取り入れ、コンサルティングファームのもとで立案し、乗り遅れないように政策提言すべきである。
- ・ 会津大学はコンピューターサイエンスの専門大学で、スマートシティやDXの時代の要請に呼応した大学であると思う。大学の設立は、会津140年の悲願と表現されていたが、当市には既に看護、教育の2つの専門大学が存在する。これらを更に強力にいかすべく連携をするのか、当市の将来を見据え、これまで拒否されてきた大学新設を検討するのか、今一度考えてみてもよいのではないかと思った。
- ・ 先端的なデジタル技術や規制改革により、ヘルスケア、地域通貨による決済、デジタル行政、防災、教育、食・農業、観光など12分野にわたり、目標を令和12年までに実現を目指すこととし、国の様々な支援制度を活用しながら、豊かな地域社会をつくっていくという理念は、誠に時宜を得たチャレンジ事業と受け止めた。明確な理念と政策の先見性に感銘を受けた。
- ・ 当市としては、直ちに会津若松市同様、国の重要施策である「デジタル田園国家都市構想」に取り組むべきであり、タイミング的には、SDGsの未来都市づくりへの取組と同時に、複合的にチャレンジすべきであると考ええる。
- ・ 交通の利便性が悪くても、会津若松市の行政と若い企業家たちの「住み続けたいまちにしよう」との熱意ある取組が一流大手企業を呼び込み、地元の企業とも連携し、住民が誇りを持てるまちへと変わりつつあることをしっかりと学んできた。
- ・ 説明を聞く中でまず感じたことは、この取組を始めて既に10年が経過してい

るということである。その10年の実績をもとにこれから先の10年を見据えて取り組んでいくとのことである。当市はこれからとすると、前途の多難さを感じる。

- いずれにしても、やっていないかといえばそうではないというような60点ではなく、しっかりとした分析のもとに目標を定め果敢にチャレンジしなければ、若者が活躍できる上越市を創ることはできないのではないかと思った。

令和4年度 文教経済常任委員会 視察報告書

1 視察日

令和4年11月15日（火）

2 参加委員

池田尚江委員長、高橋浩輔副委員長、木南和也委員、宮越馨委員、本山正人委員、小林和孝委員、渡邊隆委員、上野公悦委員

3 視察先

名称：山形県米沢市

住所：山形県米沢市金池5丁目2-25

人口：79,566人（令和4年11月1日現在）

面積：548.51km²

4 調査事項

歴史文化のひとづくり・まちづくりへの活用事例等について

5 視察の目的（視察先の選定理由、当市が参考にすべき点など）

米沢市は、上杉謙信公のご縁で結ばれた姉妹都市である。自らのまちが持つ歴史文化をアイデンティティとし、それを様々な領域にいかしながらひとづくり・まちづくりに取り組んでいる。

謙信公が生涯を過ごされ、『謙信公の聖地』である当市は、これから「謙信公祭100回、謙信公没後450年、生誕500年」の節目の年を迎える。これは当市にとって飛躍のチャンスである。この機会に、歴史文化のいかし方において一歩先を行く姉妹都市米沢を視察することは意義深いことと考え、視察先に選定をした。

また、米沢市は「ヤングチャレンジ特命課」という、特徴的な人材育成の取組を進めている。当市も参考とすべく、併せて視察の対象とした。

6 現状等（社会情勢、当市・他市の状況、問題点など）

当市は、歴史が豊かな地域である。神話の時代に始まり、中世後半から近世にかけての春日山城、福島城、高田城の三城の歴史や、北前船による港町の繁栄等々、それぞれの時代に応じて、豊かな歴史を刻んできた。また、大合併前の旧町村にも、地域に根差した歴史文化が息づいている。

しかし、豊かで多彩であるが故に、歴史文化において当市全体をひとつにまとめるシンボリックな存在を定めきれなかった面がある。また、そのことにより、歴史文化をひとづくりやまちづくりに、そして合併後上越市の一体感の醸成に、今一歩いかしきれいでいなかったのではないかと。

当市は、通年観光の取組を進めようとしているが、観光のみに囚われることなく様々な領域で歴史文化をいかしていくことを考えなければならない時が来ている。

7 説明を受けた内容

- ・ 現地視察（米沢城址 松が岬公園、上杉神社、伝国の杜 米沢市上杉博物館）
- ・ 米沢市の教育について
- ・ 米沢市ヤングチャレンジ特命課について

8 所感（当市に導入すべき点、導入に当たり注意すべき点、今後の方向性など）

- ・ 米沢市は、中心となる米沢城址周辺の整備が完成した結果、観光地として発展したと理解する。（昭和60年頃までは未整備であり、主な観光地ではなかった。）このことを当市に当てはめると、①継続して春日山城周辺の整備を着実に進める必要がある。②10年後、20年後の未来を予想した整備の必要性がある。
- ・ 松が岬公園の関係団体は2つあり、それぞれが機能しつつ連携し、松が岬公園の振興を支えている。上杉神社をはじめとして、歴史・文化、観光など目的を持った施設等であり、自ずと目標、方針などの方向性は定まってくるものと感じた。春日山城跡、上杉謙信公という当市の宝がどうあるべきかをしっかり考えて、必要なものを整えていくことが肝要であると思った。
- ・ 当市としては、上越市・会津若松市・米沢市、三市による連携イベントを提案する。各市の観光イベントに合わせて「狼煙リレー」を断行することは、地方都市連携強化の一環としても有効であり、直ちに取り組むべきものとする。
- ・ 今回の米沢市の教育のありようを学んで、自分たちの暮らしの中に自然な形で、郷土の歴史や謙信公・鷹山公の教えがしっかりと息づいていると感じた。
- ・ 米沢市の皆さんの上越市春日山城を本家として慕っておられる様子に接し、上杉謙信公の家訓「宝在心」や上杉鷹山公の名言等、精神面での伝承が特記される。
- ・ 当市は、上杉謙信公や上杉景勝公の本家本元であるが、米沢市のように教育の理念にいかされていないように感じる。当市では、「第一義」の「義の心」を継承しているものの一部の学校しか浸透していない。米沢市のように道德教育に力を注ぎ、ひとづくりやまちづくりにいかしていくべきと感じた。これからは上越市のシンボル像を強く打ち出すべきとする。そして、それを産業・経済・観光・教育等あらゆる分野に良い影響を及ぼすよう、取り組んでいかなければならない。
- ・ 謙信公～鷹山公、郷土の偉人の教えや功績を小中学校の体育館に掲げ、児童生徒の道德性の涵養や郷土に対する理解と愛着を自然に日々の学校生活に溶け込ませている。特別の教科道德からか、全国学力・学習状況調査において肯定的回答が高い。
- ・ 「米沢市ヤングチャレンジ特命課」の取組は、これからのまちづくりを担う若者が、自ら暮らすまちのことを本気で考え、主体的に行動していくための後押し役を行政が行うという、新しい切り口のまちの活性化の手法として意義あるもの

と受け止めた。当市としても、市長による若者のまちづくりへのアプローチとしての取組は、極めて有効であると受け止め、直ちにこうしたノウハウを参考に、若者によるまちづくりに取り組むべきであると考えている。

- ヤングチャレンジ特命課の取組は6年目を迎えているが、今後増えていくであろう「特命課卒業生」がその経験をいかしてまちづくりの核になっていくであろうことは、容易に想像できる。今後に期待し、注視していきたい。行政による直接的な「ひと育て」の政策に刮目させられた。
- 案内をしてくださった米沢市の職員の方の「謙信公や鷹山公の教えは、子どものころからごく自然に、身近にありました」の言葉を聞いて、これまでの取組の差を感じた。